

サイラスという男(Ⅳ)

—H. E. ベイツのあるヒーロー—

中 林 瑞 松

Ⅱ. サイラスの女たち (その二)

は じ め に

前回の「サイラスの女たち」(早稲田人文自然科学研究 第40号)では4つの短篇を読んで「こよなくご婦人を愛した」サイラスが女人と如何ように関ったかをみた。しかしあれだけでは充分ではない。なにしろ95歳で他界するまでに、彼が関った「ご婦人は数知れず」ということになっていて、10歳の少し前くらいのもの——‘The Revelation’に描かれている——から始まるのだから、あの4篇だけでは彼の人生の半分もカヴァしていない。

それだけではない。‘The Wedding’という話があって、これにはサイラスが70歳近くのときに、40歳近くの一人息子が結婚式を挙げる当日のサイラスが描かれている——ということはサイラスには妻がいた——のであるが、サイラスが結婚した相手はいったいどういう女であり、どういう経緯で結婚することになったのか。とくにサイラスのような、数多のご婦人と関りをもった男が、このひとこそと定めた女とは如何なる関りがあったのか、とくに知りたくなる。

さらに「サイラス物」(Silas stories)のうちでは、当人が幼いときに劇的(?)な関りをもった少女は、彼が69歳になるまではいちども姿を見せず、70歳以降の作品に現われているのであるが、本名では呼ばれずに、つ

ねに「家政婦」(the housekeeper)で登場している。そして二人が顔を合わせるたびに口喧嘩が始まる。サイラスが仕掛けて彼女が受けてたつ、といった形が多い。‘The Lily’ という短篇では、「私」が二人の口喧嘩を「ひそかに楽しんでやっている」と評しているのであって、その家政婦はどうしているか気になるところではある。

今回は3つの短篇を読む。‘A Silas Idyll’ と ‘Silas the Good’ と ‘The Return’ はすべて *My Uncle Silas* (Jonathan Cape 社から1967年に出版) に収められている。したがって引用文に付した頁と行の数は同版のものとは一致する。

A SILAS IDYLL

この話に登場するとき、サイラスの年齢は29か30と思われる。「サイラス物」のなかにある ‘The Wedding’ という話はすでに前々回の「サイラスの酒」(早稲田人文自然科学研究 第39号)という項目のところで読んで、あの結婚式のとき、サイラスが70歳近くで一人息子のエイベルが40歳近くであって、二人の年齢差が30であることを知った。とすると、この物語には彼が結婚の相手を見つけた経緯も語られているのだから、29か30歳の頃のことと考えてもよいのではなかろうか。

さて、サイラスは95年の生涯のあいだに、様々な仕事をしてきた。そして1860年代から70年代にかけて、すなわち20歳代から30歳代(1840年代の初めの生まれということだから)には屋根葺きを職業としていて、一廉の職人として知られており、彼が葺いた屋根にはサインとして必ず雄鶏を葉で作って付けておいたという。そしてその姿たるや派手にして華麗、誇らしげに辺りを睥睨して立っていたものだから「雄鶏が近くにいるときには雌鶏たちは要心せよ」(When the cockerel's about, let the hens look out.)という諺みたいなものが生まれたという。もちろんサイラスが

雄鶏であって、この諺みたいなものの裏付けとなるのがこの物語である。

そして、計らずとも言おうか、計算したうえでのことと言うべきか、作家はこのエッセイの目的にぴったり当て嵌まる女人との関りを物語のなかで見せてくれている。サイラスはこれまでも女人とは幾多の、そして多彩な関りをもってきたはずである。ところがこの短篇の冒頭で「梯子のテッペンから見ると世間は一味ちがった様相を呈する」と本人が言っているように、一味ちがったところでの一味ちがった経験を披露してくれており、そして話の終り近くで「彼女と結婚したさ」・・・「生きていれば、お前のおばさんだ」(‘I married her,’... ‘She’d have been your aunt if she’d lived.’) という。だからこれは、サイラスが妻とした女人との出会いを明かす話でもある。

サイラスが屋根葺きをしていた頃、ある日ベドフォードで小間物屋兼仕立屋の屋根を葺くことになった。店の一階ではリボンとかキャラコ、服の生地だとか帽子などを売っており、二階では20人ほどの娘が年配の女に教えられて服の仕立てをしている。

サイラスが仕事をしにいった日は、たまたま近所の家に不幸があり、母と娘の二着の喪服の注文が入っていて、しかもその日の2時には仮縫いをしてなければならないということで、誰もが大童（のはず）であった。彼が梯子をかけて二階の屋根へ登り降りするときには、かならず針子たちの仕事部屋の窓の外を通るにもかかわらず、彼女たちは窓のほうへ視線を移そうともせず、懸命に針を運んでいるふうであった。というのも、いかにも怖そうな年配の女が監督しているからであった。ところが、ただ一人はちがっていた。

She was a little brown creature sitting near the window, and every time Silas went up or down the ladder she lifted her head and grinned at him. Her hair was a brownish-red shade, and it crinkled and fluffed like hens’

feathers.

Once when he came up the ladder the window was open enough for him to speak to her. 'Nice day,' he said.

'Very.' (p.144, ll.19-27)

彼女は可愛い娘で窓際に坐っており、サイラスが梯子を登り降りするたびに顔をあげて、彼に笑いかけた。その髪の毛は茶色がかった赤で、雌鶏の羽毛のように縮れてふわふわしていた。

一度、彼が梯子を登っていったとき窓が大きく開いていた。「いい天気だね」と彼が言った。

「とっても」

娘の言葉はただこれだけであったが、サイラスは脚から力が脱けて膝がガクガクしたという。フラフラとなって梯子から落ちそうになったともいう。それはまことに優しく、うっとりとするような声であったとあるが、それだけではなく、彼女自身がそれほど愛らしい娘であったということであろう。

これがきっかけで、サイラス流のアタックがはじまる。一言二言話し合ってから梯子を降りると、「窓の外なんか見ないで、エリザベス。もっと仕事に精を出しなさい、二時には仮縫いなんだから」と、年配の女が叱る声がきこえた。

このわずか一言二言言葉を交わしたあいだにサイラスは必要な情報を手に入れていた。昼食の時間には、監督している女も針子たちも一緒に食事をするとのこと、そうすると昼休みに接触することはできない。わずかな隙を捉えなければ彼女と話をする機会はないことになる。

2時5分前に、怖い年配の女が茶色の大きな包みを小脇にかかえて、店を出ていくのが見えた。2時丁度に、サイラスは意気揚揚と梯子を登って、二階の窓から針子たちの仕事部屋に入りこんだ。そして雌鶏の巢に入った雄鶏よろしく振舞っていた。

ここで 'The Lily' のなかにあった 'He still kept alive within him some gay, devilish spark of audacity...' という文句が思い出される。あの短篇で昔時を語るサイラスは93歳、その年齢でさえも「いまだに放埒で、人間離れのした豪放磊落なところがあった・・・」のだから、29か30の頃は、それに若さが加っていたのだから、いっそう女にとっては魅力的であったにちがいない。

しかし、彼はただこの資質をもっていただけではなくて、適度に活用している。使いようによっては短所ともなる資質を活かしているのである。一方的にこれを相手に押しつけているのではない。相手を考えない自分勝手な遣り方ではなくて、相手をおもんばかって己の資質をだしている。だからこそ資質が長所として活きるのであろう。その様子が次の引用文でわかる。

The girls fluttered and twittered, and it wasn't long before he was plaiting a love-knot with some odd strands of straw for the little brown-haired creature who had been sitting near the window.

She was so sweet and attractive that he forgot all about the thatching, and the girls, it seems, forgot all about the supervisor. My Uncle Silas was just beginning to plait love-knots for each of the twenty dressmakers on a sort of barter system, no kiss, no love-knot, ... (p.145, ll.18-26)

娘たちはソワソワ、ペチャペチャ大へんな騒ぎ、そして程なく彼は窓際に坐っていた可愛い茶色の髪の娘に、藁で恋結びをこしらえてやっていた。

彼女はとても愛らしく魅力があったものだから、彼は屋根を葺くことをすっかり忘れており、娘たちは怖い女のことを忘れてしまっていたようである。わがサイラスおじは20人の針子ひとりひとりに、バーター方式のようなやり方で恋結びを作ってやりだしていた。恋結び一つに接吻が一度、というわけである。

最初はもちろん窓際に坐っていた娘に作って与え、それから順に他の娘たちに与えていた。ここで作家は a sort of barter system という表現を用いている。a sort of という言葉をつけて曖昧にしているが barter

system ということはバーター方式ということであって、両者が物品を交換してお互いが利益を得ることであろう。ところがこの場面では、両者（サイラスと娘）が物を交換することによって両者が平等の利益を得るのではない。雌鶏の巢へ一羽の雄鶏が入っているのである。一般的にみれば、そしてサイラスの側からみれば、これは物々交換みたいなものであるが、雌鶏にたとえられた娘たちからすると、これは願ってもない嬉しい不平等貿易にはならないであろうか。恋結びなど作ってもらえなくても、サイラスすなわち雄鶏が入ってきただけで雌鶏の娘たちは嬉しさのあまり興奮して大騒ぎをしている。それなのに恋結びを作ってくれたうえに接吻まで求められるということは、彼女たちにとっては望外の喜びとはいえないだろうか。それだから、娘たちにとってはこれは嬉しい不平等貿易ということになる。

なお、ここでサイラスは恋結びを藁で作って与えている。藁が手許にあり、そして彼が藁を扱う職人であるから、何を作って与えてもよさそうなものではあるが、しかしこの場面では、これ以外の物では駄目である。この場面に相応しくない。「愛のしるし」であり「愛が籠っている」とされる恋結びでなければならない。これを作って娘たちに与えるところに、豪放磊落なサイラスの神経の細やかさが表わされているように思える。

——さて物語では、娘たちが嬉しさで興奮している最中に、怖い女が来たふたと帰ってくる。サイラスが窓から逃げだす隙もあらばこそ、娘たちはサイラスをリンネル類を入れる簾編の籠に押しこんだ。女が急いで戻ってきた理由は、夫であり父親を亡くした母娘は落胆と悲しみのあまり気が動転してしまい、とても仮縫いなどできる状態ではない。それで母娘に体付きが似ている者が代りに着てみる。母親は監督の女に似ているから彼女が着るが、娘のほうはエリザベスに着ろという。

仮縫いのために試着をするには、下着姿にならなければいけない。女は

何も知らないが、それだから部屋には自分と娘たちしかいないと思って気安く自分も試着をするエリザベスにも命じたのであるが、彼女以外のすべての針子は、男のサイラスが籠のなかに隠れていることを知っている。動揺ともざわめきともつかないものが起きたのは当然である。

...my Uncle Silas stuffed bits of dress material into his mouth to keep from having hysterics himself, and a moment later he was looking at the nicest array of pale pink petticoats he had ever set eyes on. (p.148, ll.2-6)

……わがサイラスおじは服地の切れを口に突込んだ。我知らず悲鳴をあげるのを恐れたからである。次の瞬間、これまで見たこともない淡いピンク色のペティコートを見てしまっていた。

サイラスも事の成行きに愕然とした。しかし今さら飛びだすわけにもいわず、籠の外、すなわち部屋のなかで行なわれたことの一部始終を簾の隙間から見てしまった。もちろんエリザベスは怖い年配の女の言付け通り下着姿になって、父を亡くした娘が着る喪服を試着したのである。

この話が終ったとき「私」がサイラスに「それでどうなったの」・・・「おじさんはどうしたの」(‘And what happened?’... ‘what did you do?’)ときいた。それにたいして「男がご婦人のペティコート姿を見てしまったら、当時は出来ることといったらたったひとつ、わしはそれをやったよ」(‘I did the only thing you could do in them days when you’d seen a lady in her petticoats.’)と答えている。この「たったひとつの事」とは、その娘と結婚することであった。もちろん、これもサイラスがエリザベスと結婚した重大な要因ではあろう。しかしこれだけではあるまい。

——この日、針子たちが仕事をすませて店が閉まるまで、サイラスは籠のなかに潜んでいた。そこを出たのは夕方までいぶ遅くなってからであった。

...when he finally got out of the basket late that evening, after the shop was closed and the girls had gone, he climbed down the ladder and almost fell into the arms of the little brown-featured creature waiting for him at the bottom with a straw love-knot pinned at her neck. (p. 148, ll. 15-20)

……夕方遅く、店が閉まり娘たちも帰ったあとで彼がやっと籠から出て梯子を降りると、あの可愛い娘が梯子の下で恋結びを襟元につけて待っており、あやうくその両腕にとびこむところであった。

このこと、夕方遅くまでエリザベスが梯子の下で待っていた。ほかの針子たちは事の経緯を知っておりながら帰宅してしまった。籠に入れたままのサイラスを心配している娘もいたであろうに、その気遣いを行動で現わしたのはエリザベスひとりであった。しかも彼女の襟元にはサイラスが作って与えた藁の恋結びがピンで留めてあった。これはもう恋心の現われ以外の何物でもない。そして男サイラスがそれに応えないはずがない。

そこで「彼女と結婚したさ」('I married her.')となるのだが、籐の隙間からエリザベスの下着姿を覗き見たこと、これは一種の罪悪を犯してしまったことで、そのために彼女と結婚するということは、いうなれば一種の罪滅ぼしの意味があって、結婚にたいしては消極的な要因と考えてよい。これに対して、エリザベスが夕方遅くまで屋外でサイラスを待っていたこと、すなわち彼女の思い遣りのある行為に感動して結婚を決意したのは、さきの消極的な要因とくらべると、積極的な意味をもつ心因と考えてよいのではなからうか。とにもかくにも、これら消極的と積極的の二つの心因によってサイラスはエリザベスと結婚した。

そして「存命であれば、お前のおばさんだ」('She'd have been your aunt if she'd lived.')というサイラスの言葉を俟つまでもなく、エリザベスはサイラスにとって重要な女人であり、彼の生涯をみる場合に絶対に欠くことのできない女人である。

ただ、何故かしら「サイラス物」のなかに、妻との関りを語るものがな

い（この短篇は妻以前の女人との関りを語っているのであって、妻との関りを語ってはいない）。彼の結婚生活を土台にしたであろうと思われる短篇は皆無である。

「サイラスの女たち」という項目には直接には関係はないのだが、しかし水面下では大に関りのあることが、この短篇（だけではなく ‘The Lily’, ‘The Revelation’, ‘Finger Wet, Finger Dry’ にも見えているのだが）の終り近くに描かれている。すなわち「存命であれば、お前のおばさんだ」とサイラスが言った直後に、

And as he spoke there would come into my Uncle Silas's eye an expression not often seen there. It was soft, distant, regretful, and indescribably tender. It transfixed him for one moment and then he became his old sardonic self again. (p.148, l.27-p.149.l.2)

そしてそう言うと、わがサイラスおじの目にはめったに見られない表情がうかぶのであった。それは穏やかな、夢みるような、哀惜の念にあふれ、そして名状しがたいものであった。それがほんの一時、彼をそのままにしておいて、つぎの瞬間には彼はいつもの他人を小莫迦にするような態度にもどっていた。

上の引用文を読むと、サイラスという男のなかには、彼の目に「穏やかな、夢みるような、哀惜の念にあふれ、そして名状しがたい優しい表情」が浮かぶ原因となるものと「彼をいつもの他人を小莫迦にするような態度」をとらせるものの二つが併存しているようである。どちらかというと後者がよくシャッキリ出ていて、多くの場面で描写されている。それだからサイラスという男は、いつも他人を小莫迦にしている人物と読まれがちであるが、そうではない。もう一方の時偶にしか描かれないもの（といってもそれ自体が描かれているのではなくて、そのものが働いた結果が描写されているのであるが）は、たしかに時偶にしか現われないから、その時は読者をハッとさせて、サイラスにはこのような面もあったのかと思わせる。

ここにも、作家が創りあげたサイラスという男の魅力があるのであろう。

SILAS THE GOOD

この短篇はすでに「サイラスの酒」という項目(『文学とことば』1991年3月刊行)のところで読んだ。しかしあの時はサイラスの酒の飲み方や使い方に重点をおいて読んだのであって、今回はサイラスの女人との関り方を読んでみたい。サイラスは95年の生涯のうちで様々な仕事をしてきて、一時は墓掘りをしていたことがあった。そして「絶対禁酒の話」‘A Teetotal Tale’ (前回の早稲田人文自然科学研究 第40号の「サイラスの女たち」で読んだ)という短篇で「(わしは)三つのときにビールを飲みはじめた」と言っていることと、この話のなかで「わしは80年以上もそれと闘ってきたってわけですよ」(‘I’ve been fighting against it for eighty years and more....’)と言っていることから判断すると、この出来事は80歳の前半のものと思われる。

——この年の春は雨もなくてとても寒かったのに、5月のこの日は日差しも強くて夏のようにであった。昼頃までには墓穴掘りの仕事がかかり捗ったので、昼食をすませるとサイラスは穴の底に横になった。

He had been asleep for a quarter of an hour or twenty minutes when he woke up and saw someone standing at the top of the grave, looking down at him. At first he thought it was a woman. Then he saw his mistake. It was a female.

He was too stupefied and surprised to say anything, and the female stood looking down at him, very angry at something, poking holes in the grass with a large umbrella. (p.114, ll.11-18)

彼は15分か20分ほど眠っていただろうか。目を覚ますと誰かが墓穴の頭のほうに立って見下している。最初は女だと思った。すぐに間違いであることに気づいた。それは女性であった。

彼はびっくり仰天してしまって何も言えなかった。女性は仁王立ちになって彼

を見下し、何かにとても腹を立て、大きな傘で地面をつついていた。

ここで woman と female という語が対比して用いられている。この両者の辞書的な意味はひとまず置いて、作家が用いている意味の相違は、この女がサイラスと関っていく過程で現われてくるようになっている。サイラスの目に a female と映った女——痩せこけて蒼白く、蕪型提灯のような顔をして、ばかでかいブーツを履き、厚手の黒いスカートの下から茶色のだぶだぶしたブルーマをのぞかせている——は、サイラスに弁解する余裕も与えずに捲くし立てた。

このときのサイラスは、たしかに酔払って眠りこけていたと思ひ違いされても仕方がない。どう鼻尻目にみても、厚ぼたくて赤いぬめぬめとした唇、左目は血走っていて、鼻ときたら外皮が硬くなった苺のようで、しかも片手にはビール壺をつかんでいる。こんな風体だから、どうしたって酔払った船乗りになんか見えなかった。

それで女はサイラスに噛みついたのである。聖なる土地、死者にとって神聖であるべき墓地で大酒をくらって眠るなんて言語道断である、怠惰であり不敬である、神を冒瀆するものである、無知も甚だしい、不屈千萬である等々の、思いつくかぎりの言葉を使って、まるで鳥が泣き喚くように、彼を非難した。口だけでは足りずに全身で怒りを表わした。手に持った傘の先で地面を突きまくり、足では地団駄を踏んで怒ったのである。そして、地団駄を踏むたびに、だぶだぶのブルーマが少しずつずり落ちて、下から見上げる恰好のサイラスには、今にも完全にずり落ちてしまいそうに見えるのだが、それを注意できる雰囲気ではない。そんなことをすれば、火に油を注ぐようなもの。サイラスもそれは差し控えた。そして5分ほど彼女に言いたいだけのことを言わせておいた。それからやおら、

...he raised his panama hat and said, 'Good afternoon, ma'am. Ain't the

cowslips out nice ?'

'Not content with desecrating holy ground,' she said, 'you're intoxicated, too !'

'No, ma'am,' he said, 'I wish I was.'

'Beer !' she said, 'Couldn't you leave the beer alone in here, of all places ?'

Silas held up the beer-bottle. 'Ma'am,' he said, 'what's in here wouldn't harm a fly. It wouldn't harm you.'

'It is responsible for the ruin of thousands of homes all over England!' she said. (p. 115, ll. 15-25)

……彼はパナマ帽をちょっと上げて言った、「今日は、奥さん。キパナノクリンザクラが綺麗じゃないですか」

「聖なる土地を汚しただけじゃまだ足りずに」と彼女は言った、「酔ってるなんて」

「いいえ、奥さん、そうならいいんですがね」

「ビールヨッ」彼女が言った。「ところもあるうに、此処でもまだビールを持っているんですか」

サイラスはビール壺を持ちあげて見せた。「この中のものは蠅だって殺せやしませんよ。奥さんにだって無害だ」

「英国じゅうの幾千もの家庭を破壊したのがそれなんです」と彼女が言った。

ここでの二人の言葉の応酬によって、女の性格は体付きに似て神経質で口喧しく、御節介やきで女道学者然とした姿が想像できる。サイラスがビール壺を持っていたのを見て、ビールを飲んで酔っていたと思うのは仕方がないとしても、それをすぐに「幾千もの英国の家庭の崩壊」にむすびつけたのは、口喧しい御節介やきな a female の面目躍如といったところである。

ここでサイラスがビール壺を持っていたのには理由がある。彼は仕事に出るときには必ず昼食といっしょに専用の飲み物 (cold tea) を持っている。このコールド・ティについては '... always cold tea with whisky in it, but the basis remained, more or less, cold tea.' とある。しか

もこれには冬用と夏用とがあって、あくまでもベースは cold tea であるが、もちろん冬用のには混ぜるウィスキーの量が多くなる。そして「この年の春は雨もなくとても寒かったのに、5月のこの日は日差しも強くて夏のようにであった」——これは物語のごく初めの所、114頁の1行目から3行目にかけての記述であって、伏線になっている——のに、持参したのは冬用の コールド・ティ であった。しかも サイラスのことだから “more or less” もそれなりに読むべきであろう。

この冬用の コールド・ティ をサイラスは女に飲ませようとしたが、頑なに拒んで飲もうとはしない。しかしサイラス一流の言葉巧みな誘いに遂に心が動いて、飲んでみる気になる。しかし直かに飲むのは拒否したので、カップに注いで渡した。これが一杯目である。しかしもちろん一息に飲みほすことはせずに、唇をカップの縁につけて舐めたていど。その時の言葉が「たしかにお茶みたいね。」それを見てサイラスが、グッと一口飲[★]れと勧める。つられて一口飲んで口のなかで味って、その時の言葉が「とてもさっぱりして美味しいわ」である。この時はまだ一杯目の コールド・ティ を一口飲んだだけである。サイラスは上衣を地面に広げて坐るように勧めた。

Rather to his surprise, she sat down. She took another drink of the tea and said, 'I think I'll unpin my hat.' She took off her hat and held it on her lap.

.

She smiled thinly, for the first time. 'I am sorry I spoke as I did. It upset me to think of anyone drinking in this place.' (p.116, l. 26-p.117, l.7)

彼が大いにびっくりしたことに彼女は坐ったのだ。もう一口飲んで言った、「帽子を脱ぎますわ。」彼女は帽子を脱いで膝においた。

.....

はじめて、彼女は微かに頬笑んだ。「あんな言い方をしてごめんなさい。この場所で誰かがお酒を飲んでいると思っただけで、わたし、動転してしまいました。」

この another drink of the tea は一杯目の二口目である。それなのにすでにアルコールが回って、はじめの頑な心が解れてきた様子のはっきりと現われている。

二人の会話がさらに進むにつれて、この変化もさらに進むことになる。それと同時に コールド・ティの量も多くなってゆき、やがてサイラスは「もっと如何です、奥さん」(‘Have some more, ma’am,’)と二杯目を注いでやる。女は今はいよいよ素直にサイラスの言う通りに注いでもらっている。もちろん二杯目のコールド・ティも一口、また一口と飲みすすみ、それにつれて彼女自身はさらに変化していった。

はじめ外形は女でありながら彼女には人間らしい(human)ところが全くなかった。人が墓穴に横たわっているのを見ただけで、そしてサイラスの容貌が容貌というだけで、理由も訊こうとせずいきなり怒鳴りはじめ、御大層な言葉を並べて人を攻撃し、本人の弁明をきこうともせずに、己の説が正しいかのように主張して憚らない。人間らしいところは少しも感じられなかった。このような女を作家は a female で表わしていた。

それがいまサイラスと語り合い、その勧めに従って、多分にウィスキーを混ぜた冬用のコールド・ティ——彼が「夏用のにはウィスキーをほんのちょっぴり入れ、冬用のにはたっぷりと入れておいた」(‘I had a summer ration with only a nip of whisky in it, and then I had a winter ration wi’ pretty nigh a mugful in it.’)と言っているように、そしてその直ぐ後に「この日まで寒かったので、冬用のままにしておいたんだ」と言っているように、女が二杯目を飲んでいるコールド・ティは、あるいは茶よりウィスキーの分量の方が多い、ウィスキーに茶を混ぜたものであったかもしれない——を一口、また一口、そしてまた一杯、また一杯と飲んだだけか「どういう訳だか彼女は女性には見えずに、女になっていた」(…somehow she stopped looking like a female and became a

woman.) のである。

これからさらにコールド・ティを飲みながらサイラスが彼一流の大袈裟な話をしきかせた。すなわちサイラスが生まれたのは「飢餓の40年代」の初めで、とても窮乏の時代であった。まともな食事が摂れずに大麦粥で飢えを凌いでいた。水質も悪く伝染病さえ流行して、誰もがビールを飲んでた。赤ん坊までもビールを飲んだ。そして彼も80年以上ものあいだそれと闘ってきて、勝ち勝った、等々。女がコールド・ティを飲みながらそれを聞いて信じこんでいくうちに、いっそう人間的になって、サイラスに同情するようにさえなっていた。それを見て、サイラスはさらにコールド・ティを勧めた。

'... You'll have some more cold tea, ma'am, won't you?'

'It's very kind of you,' she said.

So Silas poured out another cup of the cold tea and she sat on the graveside and sipped it in the sunshine, becoming all the time more and more human. (p.118, ll.12-16)

「……奥さん、もっと如何^{どう}です」

「ご親切さま」彼女が言った。

そこでサイラスはもう一杯コールド・ティを注いだ、彼女は墓の縁に坐って陽光を浴びながらそれを啜り、さらにさらに人間らしくなってきた。

いまはすっかり意気投合した二人、というよりはサイラスにすっかり馴染んでしまった女は、この三杯目も飲んでしまっ、そのうえ30分以上も坐りこんでいて、サイラスの話に耳を傾けていた。もちろんこの間にも、記述はないが、サイラスがコールド・ティを勧め、そして女は勧められるままにコールド・ティのコップを重ねたはずである。しかし、そこまで作家が物語る必要はない。女が三杯目のコップを空にするところまでで、十分に目的は達せられたからである。

そして、女が辞去するときには、サイラスがわざわざ墓穴から出てきて、

握手をして別れるまでになっていた。去っていく女の顔がアルコールのせいで紅潮してはいたが、その歩き方には来た時と変らない威厳がただよっていたという。しかし、巨大なブルーマが片方ずり落ちそうになっているところは当初と何ら変るところはなかったが、いまはサイラスが何も憚るところなくそれを注意してやれるまでに、女の雰囲気は軟化していたのである。

The amazing bloomer-leg had come down again, and Silas could not resist it.

'Excuse me, ma'am,' he called after her, 'but you're liable to lose your knickerbockers.'

She turned and gave a dignified smile and then a quick, saucy kind of hitch to her skirt, and the bloomer-leg went up, as Silas himself said, as sharp as a blind in a shop-window. (p.120, ll.6-12)

莫迦でかいブルーマがまたずりさがっていた、それでサイラスは黙っていられなかった。

「あの、奥さん」彼は彼女の後から声をかけた、「ニッカーボッカーがおっちそうですよ」

彼女は振りむいて威厳のある笑いをみせて、粹に、そして素早くスカートを引っ張りあげた。するとブルーマは、サイラスが言う通り、店の窓のブラインドのようにサッと上った。

ソウルブルックス発 2 時45分の上り列車に、酒の匂いをブンブンさせて女は乗っていた。片手に大きな傘を持っているのは前と同じであるが、もう一方の手にはキバナノクリンザクラの束を持っていた。もちろんサイラスが摘んで持たせたものであろうが、当初の墓穴の上に立ってサイラスに捲し立てていたのとは同一人物とは思えない変りようである。さらに女は誰彼かまわず、その日の午後に会った人物、すなわちサイラスを「善い人だ、善い人だ」と言っていたという。

物語の初めにはこの女はサイラスの目には a female と映った。しかし

数時間の関りのうちに次第に変わっていった、すなわち「より人間らしく」(more human)そして「さらにさらに人間らしく」(more and more human)になっていった、やがては a woman という語で表わされるようになった。すなわちサイラスがその力で a female から a woman に変えた、換言すれば、冷やかで頑な女のなかに温かな人間味を呼び覚ました女である。

THE RETURN

この短篇も「サイラスの酒」(早稲田人文自然科学研究 第39号 平成3年3月発行)のところですでに読んでいるが、あの時はサイラスと酒との関りを主に読んだのであって、ここではサイラスと女人との関りを主に読んでみたい。

とはいうものの、この話はサイラスが他界してから1年と少し経った頃のことなので、もちろんサイラスは姿を現わさない。しかしサイラスの家を買って住むウェイド＝ブラウン夫妻の若妻と「サイラス物」に聞き手として登場する「私」との会話で話題になる。ミセス・ウェイド＝ブラウンはもちろんサイラスを直接には識らないのだが、サイラスが長年住み馴れた家に住んでから、彼についての一面的な印象をもっているのだから、本人は不服ではあろうが、「サイラスの女」としてこのエッセイに出てもらう。

もう一人、家政婦を登場させる。彼女も物語には実際には姿を見せないのだが、「私」とミセス・ウェイド＝ブラウンとの会話で話題になり、この最後の短篇で、これまでの「サイラス物」の家政婦とは全く異った姿が若妻の口から語られるので、ぜひとも「サイラスの女」としてこのエッセイに登場してもらわねばならない。

物語は、すでに人手に渡っているサイラスが住み馴れた家を「私」が訪れるところから、始まる。サイラスがいる頃にはよく訪れて隅から隅まで

知り尽していた家、特にワインや馬鈴薯を貯えてあった地下室はよく知っていた。しかしサイラスがいなくなつてからは、いちども訪れずに1年以上が過ぎた。人が住んでいなければ元の儘ということもあり得る。しかし他人が住んでいるのだから変つてしまつてゐるであらう、という不安はあった。家の中を、そして特に地下室に入りたかつた。しかしそんな場所を理由もなく他人に見せるわけがない。それで新聞社の探訪記者と身分を偽り、そして、地下室には特別な歴史的意味があるので記事にしたいのだと言ひ繕つた。

地下室は昔時のままであつた。塀や庭は昔の面影を留めないほどに変えられていたが、地下室は夥しい数のワインの壺こそなくなつていたが、匂いはサイラスがいたときのままであつた。しかしミセス・ウェイド＝ブラウンは、

‘He was a terrible old man who lived here,’ she said.

‘I know,’ I said.

‘Did you know him?’ she said.

‘Everybody knew him. He was famous—notorious.’

‘We found hundreds of empty bottles in the cellar,’ she said.

‘He must have done nothing else but drink.’ (p.180. ll.23-28)

「此処に住んでいたのは大変な老人だったのですね」彼女が言った。

「そうですよ」私が言った。

「ご存知だったんですか」彼女が言った。

「知らない者はおりません。あの老人は有名——悪い意味で、だったんです」

「地下室には何百本も空の壺があつたんです」彼女が言った。「あの人はきつと飲んでばかりいたんですわ」

もちろん彼女はサイラスとは一面識もない、それに彼に関しては何の情報も持つてはいない。しかも「私」の目に映つたウェイド＝ブラウン家、さらに彼女に関する描写から推測すると、ある面では二人は正反対の人間である。すなわち、サイラスがその実を摘んでワインを造つてゐた木やほ

かの庭木が切り倒されて、庭は広い空地になっていた。フェンスも玄関のドアも真白にペンキが塗られていて、彼女が着ている服も白ならば、手にしている毛糸も編棒も白、そのうえ彼女の顔も白かった。居間の壁には黒縁の額に詩行を入れて掛けてあり、結婚祝いの贈り物がピアノやサイドボードの上にきちんと並べられていた。

このようにみえてくると、ミセス・ウェイド＝ブラウンは内も外も汚れを知らぬ純白で、几帳面を通りこして潔癖でさえあるように思われる。このような性格の若い女だからこそサイラスを *a terrible old man* と呼び、さらに「きっと飲んでばかりいた」と言っても不思議はない。これは何も彼女に限らない。彼女ほど潔癖でなくても、普通的女でサイラスのことを何も知らなければ、これくらいのことは思うにちがいない。そういう女を彼女が代表しているとは考えられないだろうか。

物語では、このあと「私」は地下室に棄て忘れてあった数本のワインが入った壺を処分してやると言って頂戴し、さらに豚小屋の壁に掛けてあったサイラス愛用の古い鉄砲も、適当に言い包めて頂戴した。あまり長居をすると、嘘の身許が露見するのを心配して暇を告げようとする、ミセス・ウェイド＝ブラウンはあることを思いだして、

‘A woman,’ she said. ‘She said she wanted to look at the place again for the last time.’

For some reason I could find nothing to say, and I stood in silence while she told me of how on a day in summer a woman—it could only have been my Uncle Silas’s housekeeper—walked into the garden and stood there like someone stupefied, not saying much except to repeat at intervals that she wanted the bath. ‘I should like the old bath as a keep-sake, to do my washing in.’ ... the old woman stood there in the garden and began to cry, still saying that she wanted the old bath, until finally, as the young woman said to me, ‘I had to send her away because I could see she was either drunk or wrong in the head.’ (p.189, ll.13-26)

「女の人が」と彼女が言った。「その方が最後に屋敷を見たいと仰有っていました」

なぜか私には言葉が見つからなかった、で、その女のことを彼女が話しているあいだ黙って立っていた。夏のある日、その女——わがサイラスおじの家政婦にちがいない——が庭に入りこんできて、ときどき鹽がほしいと繰り返すだけで何も言わずに、気抜けしたように行んでいたという。老女は「古い鹽を形見にほしい、洗濯をするのに使うから」と言っていたという。老女が庭で古い鹽がほしいと言いながら泣きだしたので、若い女は「とうとうその女を追ひ私わなくてはなりませんでしたわ、だってその女、酔っているか頭が変になっているかどっちかだと思ったんですもの」と言った。

ここでミセス・ウェイド＝ブラウンの口から語られた家政婦はもちろん、20年以上もサイラスと生活を共にして彼の面倒を見てきた女である。家政婦といっても通いの家政婦ではなくて、おそらく「住込みの家政婦」(a companion housekeeper)——この言葉は *Colonel Julian and other stories* の 'The Little Farm' という短篇にある——であって、サイラスが70歳代に入って独りきりになってから死ぬまで一緒にいた。当然のことながらサイラスの最期も看取っている。

彼女が登場する短篇は5つほどであるが、出るたびにサイラスと派手に渡り合って、サイラスがサイラスなら彼女も決して負けてはおらず、(傍目には)遠慮会釈もなく辛辣な言葉を投げつけている。ところが実はこの派手な口喧嘩は、「百合」という短篇のなかで「私」が指摘してサイラスも認めたように「彼ら(サイラスと家政婦)は20年ものあいだ夜となく昼となく、ひそかに楽しみながら続けてきた」のである。サイラスが「お前なんか出て失せろ」と言うのと「もちろん出て行きます」と応えたり、サイラスが「いい厄介払いだ」と言うのと「あんたがそんなに老い耄れでなかったら、おもいっきりお尻を叩いてやるのに」と応酬する場面を読むと、いくら20年以上の同棲生活とはいえ、まことに気性の激しい女のように思われる。

それもそのはずで、彼女が最初に姿を見せるのは‘The Revelation’のなかであって、サイラス少年の衣服だけを抱えて牧草地を逃げていくのが、彼女の少女時代の姿であった。あの短篇を読んだとき（早稲田人文自然科学研究 第40号 平成3年10月 II. サイラスの女たち）「この女の子の行為は、表面だけで見れば悪巫山戯、あるいは単なる悪戯にしかすぎないが、じつは無意識の性衝動によるものではなからうか。性衝動というのが言い過ぎであるならば、異性に対する特殊な気持といってもよい」と記しておいたが、たしかに、サイラス少年の衣服だけを持ち去ったことは、彼に対する少女の幼ない愛情の現われであろうが、それと同時に、どこまでもどこまでも、追われるのを知っておりながら、衣服を投げすててもせずに逃げていくのは、気の強さ、気性の激しさを表わしていると見られないだろうか。

家政婦のこの気性の激しさが、たとえ楽しみながらとはいえ、サイラスとの派手な口喧嘩になっているのであって、この短篇を読むまでは、我々は彼女の一面だけをイヤというほど読まされてくるわけである。そして「癪癪もちで」「冷酷で」「度し難くて」「気難しい」そして「横暴な」老女の姿が我々の脳裏にこびりついてしまうのである。ところがこの短篇では、彼女の激しい気性がこれまでの短篇とは全くちがった現われ方をしていいる。彼女は気持ちの昂ぶりを見も知らぬ他人（ミセス・ウェイド＝ブラウン）の前で抑えられなかったのである。

結局、サイラスは「数知れぬ」女と関りながら、派手な辛辣な言葉の遣り取りをしながらも心の中ではそれを楽しんで出来る女——ということは一言でいえば共に暮して楽しい女ということになろうか——と晩年をすごし、最期を看取ってもらったことになる。幸せな晩年であった。

最後に、家政婦はミセス・ウェイド＝ブラウンに盟を欲しいといっている。サイラスが毎週金曜日に湯浴びをした盟である。それを形見にしたいのだという。住込みの家政婦として20年以上もサイラスの面倒をみてきた

のだから、彼を思いだす縁となるものはいろいろあるだろう。ワイングラスは彼がよく使っていたものであり、ワインを飲むときには壺を地下室から持って来い、来ないで口喧嘩があった。彼が坐っていた椅子、これにも白くがあり、彼の母がそのなかに金を縫いこんでおいてくれたのに、長い間それを知らずに金の上に坐っていたという物である。しかし二人で共に使用した(?)ものとなると、やはり盥である。20年以上にもわたって週に一度は、かならず派手な口喧嘩をしながらサイラスの躰を洗ってきた、この盥に勝る品物はなかった。

この項目のおわりに

この項目で読んだ僅かに7つの短篇のなかだけでも、サイラスは20数名の女人と関りをもったことになる。ただし明確な形で関りとなると7人ということになるが、物語を読んだ限りでは、彼と関りをもったことで後味の悪い思いをしている女人はひとりもない。いやそれどころか、誰もが喜ばしい思いをしているのである。

‘The Revelation’の少女は素裸のサイラス少年に追われながらも、彼の衣服だけを持って逃げた。幼い愛情と気性の激しさが混り合った行為によって彼に対する気持を表現している。そして後に住込みの家政婦となつて、晩年のサイラスの支えとなつた。‘The Lily’の少女は、夜中に庭へ忍びこんだサイラス少年に百合の根を自ら掘って与え、サイラスの心に愛しい女として棲みつづけた。‘A Teetotal Tale’の母娘は、夫であり父親である男をアルコール中毒のため施設に入れており、酒に対しては極度の恐怖心を抱いているにもかかわらず、酒好きのサイラスが二月近くの間禁酒の末に、母と娘と別々に会うという誰もが満足する打開策を考えだした。‘Finger Wet, Finger Dry’の若い人妻はサイラスと楽しんでいる最中に夫が帰宅し、慌てて彼を地下室へ隠したまではよかったが、それを一

週間も忘れていて、サイラスの命を危険に曝しはしたものの、サイラスにとっては可愛い女であり、彼女にとってもサイラスは楽しい男である。‘A Silas Idyll’の20人の針子たちは恋結びと接吻をプレゼントされ、そのうちのひとりサイラスの妻となったのだから、これ以上何も言うことはない。‘Silas the Good’の女は初めは a female であったのに、数時間のサイラスとの関りで human になっていき、a woman となって立ち去って行く。そして彼を「善き人」と信じきっている。‘The Return’の家政婦は‘The Revelation’の少女の後の姿である。家政婦となって登場するようになってからは、いつもサイラスと口で渡り合って一歩も引けを取らない気の強い女であるが、ここではサイラスの生前には見られなかった現われ方をしている。顔を合わせると口喧嘩をしていたのは、実はそれだけ二人の仲がよかった証拠であって、別の面を見せてくれたということである——ということで、サイラスは女人にとっては化け物（普通の人間とは思えないような能力をもった人）的な存在であったといえよう。

（未完）